

監督者の視野の違いが就学前児の不正行為に及ぼす影響

—対面・オンライン場面での比較—

大西 実乃里

不正行為はあり触れたものであり、大多数の人が行う。ただし、いつも同様に不正行為を行うのではなく状況によって頻度は変動する。したがって、不正行為を誘発する状況要因を特定し改善することは不正行為予防の観点において有用である。また、不正行為を予防するためには不正行為が常習化するまでの時期に着目し、状況要因について検討することが重要である。不正行為に関する発達研究では、就学前の子どもでも規範を破るという不正行為が見られることが分かっている。また、不正行為の有無に関する状況要因についての研究も進められており、評判や監督の有無、物理的な環境の変化によって不正行為の頻度が変わることが明らかになっている。このように、近年の発達領域では不正行為がどのような環境で起きやすいかという要因についての研究が進められている。

不正行為が起きやすい状況要因の一つにオンラインという環境がある。一方で、近年、感染症拡大防止や個別最適な学び、協働的な学びのためにオンライン教育が進められており、幼児期にもオンライン教育が用いられている。そのため、オンライン不正行為について調べ、改善策を立てることが重要である。

オンラインで不正行為が起きやすい理由として、監督者の見える範囲が狭く不正行為がばれにくいことが挙げられる。オンラインでの不正行為がばれにくいと理解するためにはオンライン上で交流する他者視点を獲得する必要がある。しかし、従来の他者視点取得課題は対面形式で行われており、子どもがオンライン上の他者視点を獲得しているかについては検討されていない。デジタルデバイスの普及や不正行為防止の介入策開発のためにもオンライン上の他者視点取得について検討することは重要である。

本研究は、5 歳児 56 名を対象に、以下の課題を実施した。他者視点取得課題では監督者から見えている範囲を幼児に質問した。クイズ課題では 5 歳児が解けない難易度のクイズを出題し、隣に設置されたカンニングペーパーを見て答え写す不正行為をするかどうか調べた。これらの課題をオンライン群と対面群で行い、群によって不正行為をする児の割合に差があるか検討した。

本研究の結果、他者視点取得課題ではオンライン群において机の中央のみ誤答する児が多かった。ただし、カンニングペーパーを置いた机の左側は両群において大半の児が正答した。クイズ課題では、不正行為をした児が対面群よりもオンライン群で多かった。このことから、オンライン場面での他者視点取得は対面場面と異なることが示され、オンライン群で不正行為をする児が多いことが示された。

他者視点取得課題の結果から、5 歳児はオンラインの他者視点の獲得が正確でないことが示された。その要因として、カメラの視野を正確に推測できるほどカメラを使う経験をしていないことが考えられる。オンライン場面では対面場面よりも年長の年齢で正確に視点取得できるのかもしれない。

他者視点取得課題の結果から不正行為のばれにくさを理解していたことが示唆され、クイズ課題の結果から、オンライン場面において不正行為が多いことが示された。したがって、オンライン群の児は不正行為がばれる可能性が低いために不正行為を行いやすかったと考えられる。このようにオンラインにおいて監督の効果が減少したことへの対策として、監督者から学習者のいる環境が広範囲にわたって見えていることを示したりイメージさせたりすることが挙げられる。

今後の研究では、オンラインで不正行為を抑制する環境について調べ、不正行為の予防策を検討したい。また、対象年齢を変更して実験を実施し、オンライン不正行為の発達について明らかにしていきたい。(比較発達心理学)